



第36回政策本会議

「文化交流分野における地域協力の進展と今後の課題」

— 速 記 録 —



基調報告を行う白石さや有識者議員
(2009年12月2日)

2010年2月
東アジア共同体評議会

まえがき

この速記録は、2009年12月2日に開催された東アジア共同体評議会（CEAC）の第36回政策本会議の議論を取りまとめたものである。

当評議会は4年前に『政策報告書：東アジア共同体構想の現状、背景と日本の国家戦略』を発表し、各方面から多大な評価を得たが、その後の東アジア共同体構想をめぐる諸情勢は大きな変遷を遂げている。そこで、当評議会では、上記『政策報告書』の改訂版を『東アジア共同体白書』の名前で発行する目的で、「東アジア共同体構想をめぐる動きの現状をどう評価するか」との総合テーマの政策本会議を全11回にわたり開催してきた。この第36回政策本会議は、その全11回の政策本会議の第9回目として開催したものであり、当評議有識者議員である白石さや東京大学大学院教授を報告者にお招きし、「文化交流分野における地域協力の進展と今後の課題」と題し報告を受け、その後出席議員全員により意見交換を行った。

この速記録は、当評議会政策本会議の活動の内容を、当評議会議員を中心とする関係者に報告することを目的として、作成されたものである。ご参考になれば幸いである。なお、「1. 概要メモ」ならびに「2. 速記録」の「(1)議長挨拶」および「(2)白石さや議員の基調報告」の部分のみは、ホームページ上でも公開しており、閲覧可能である。

2010年2月15日
東アジア共同体評議会
議長 伊藤 憲一

第36回政策本会議

「文化交流分野における地域協力の進展と今後の課題」

—速記録—

目 次

1. 概要メモ.....	1
2. 速記録.....	3
(1) 議長挨拶.....	3
(2) 白石さや議員の基調報告.....	4
●変化するアジアの家族観.....	4
●ポピュラーカルチャーの創造性.....	5
●「文化の祭典」による共同体構築.....	6
●積極的資源としての文化の多様性.....	7
●「想像の共同体」と東アジア地域統合.....	9
●ポピュラーカルチャーが育む東アジアの共同体意識.....	10
(3) 議員間の意見交換.....	13
3. 席上配布資料.....	31

1. 概要メモ

第36回政策本会議は、「東アジア共同体構想をめぐる動きの現状をどう評価するか」との総合テーマのもとで開催する全11回の政策本会議の第9回目として、「文化交流分野における地域協力の進展と今後の課題」と題し、開催された。当評議会有識者議員である白石さや東京大学大学院教授を報告者に迎え、白石議員からの報告を受けたあと、出席議員の間で意見交換を行った。その概要は次の通り。

1. 日時：2009年12月2日（水）午後2時より午後4時まで
2. 場所：日本国際フォーラム会議室
3. テーマ：「文化交流分野における地域協力の進展と今後の課題」
4. 出席者：下記の通り19名（○印は発言者）

報告者：○白石 さや 東京大学大学院教授

出席者：

<副会長>

井上 明義 三友システムアプレイザル社長

<議長>

○伊藤 憲一 日本国際フォーラム理事長

<常任副議長代行>

村上 正泰 日本国際フォーラム理事・所長

<副議長>

大河原良雄 世界平和研究所常勤顧問

黒田 眞 安全保障貿易情報センター理事長

○進藤 榮一 筑波大学大学院名誉教授

○平林 博 日本国際フォーラム副理事長

○吉田 春樹 吉田経済産業ラボ代表取締役

<シンクタンク議員>

吉田 進 環日本海経済研究所理事長

<シンクタンク議員代理>

平井 照水 伊藤元重総合研究開発機構理事長代理

<有識者議員>

○石垣 泰司 アジアアフリカ法律諮問委員会委員/外務省参与
岩國 哲人 バージニア大学教授

河東 哲夫 Japan and World Trends 代表

○木下 博生 全国中小企業情報化促進センター参与

○坂本 正弘 日本戦略研究フォーラム副理事長

○田島 高志 国際教養大学教授

成田 弘成 桜花学園大学教授

<ゲスト>

○三原龍太郎 経済産業省通商政策局 APEC 室長補佐

5. 審議の概要

(1) 冒頭、白石さや議員から下記の通りの基調報告があった。

(イ) 積極的財産としての東アジアの「文化の多様性」

「文化」は多義的な言葉であるが、最近の「文化」の定義をめぐるコンセンサスは、それが「人々が人生に意味を付与する場」、すなわちアイデンティティの拠り所であるというものである。「文化の多様性」ゆえに東アジアでは共同体構築が困難である、との指摘がよくなされるが、米国の文化人類学者 Hildred Geertz は1962年の段階ですでに「東南アジア島嶼部を特徴づける多様極まりない文化は、古来海上交通の要衝として複数の文明・文化が交差した結果であり、その意味でこの地域に統一された海域世界が形成されていたことを意味する」と述べているが、この考えは東アジアの「文化の多様性」がこの地域の共同体形成においてマイナスどころか貴重な財産たりうることを示唆している。事実、近年、東アジアでは、経済活動のみならず生活空間レベルにおいても共通のアイデンティティが形成されつつあり、これは東アジア各地がマンガ、アニメ、インターネット、電子ゲームといった外来文化と接触した結果といえる。

(ロ) 「想像の共同体」としての「東アジア共同体」

Benedict Anderson が提唱した「想像の共同体」の概念は、nation state 形成過程における、①偶然の線引きとしての国境区画、②その区画内での交通網・メディア網の整備、③その区画内での人間の移動ライン、といった諸段階を通じてなされる空間・時間への意味付与、すなわち「想像」の重要性を指摘するものであるが、この理論は東アジア共同体構築においても、参考となりうる。ただし、Anderson は共同体 (community) という概念をあくまでも nation state 形成を念頭において用いており、これをそのまま東アジアという地域全体に拡大解釈すると、たとえば過去の「大東亜共栄圏」構想などを連想させるなど望ましくない結果を招きかねない。したがって「共同体」ではなく「ネットワーク」といった語を用いることも一案ではないかと考える。

(ハ) 「近代的孩子」と「アジア的近代家族」の誕生

東南アジアをはじめ東アジア各地では、1980年までは、地縁的結束と大家族を特徴とする伝統的家族形態が支配的であったが、1990年代以降、そのような家族形態は、父・母・子で構成されプライバシーを重んじる「近代的家族」に急速に取って代われ、同時に、「庇護されるべき存在、教育されるべき存在、としての子ども」といった「近代的孩子観」が支配的となった。このような変化の背景には、この時期にいわゆる「中間層」と呼ばれる都市型文化を持つ社会層が増加したこと、また、そのような「中間層」が学校教育・マンガ・アニメを含むメディア等を通じて、外来の価値観を吸収したことがある。その際、重要なことは、この地域に欧米発の価値観が入る前に、日本発の価値観が入ったことで、欧米的視点からは拒絶されかねないある種のポピュラー・カルチャー（例えばロボット・アニメなど）をも自然と受容しうる受け皿が備わったことである。そのため、日本発のポピュラー・カルチャーは急速にこの地域に浸透し、この地域に共通の生活感覚が定着することとなった。このような「近代的家族」は、ナショナリズムや宗教的上の教義よりも、家族の安寧を優先させる傾向にある。

(ニ) 東アジアにおける文化的コーディネーターとしての日本の役割

東アジアの多彩な文化の上に共通のアイデンティティが成立しつつある現状は、この地域に「緩やかで多彩な文化共同体」とでも呼ぶべき文化的ネットワークが形成されつつことを示す。このようななか、我が国の果たすべき役割は、これまでの資金援助一辺倒の貢献から脱皮し、そのような文化的ネットワーク形成のための「文化的コーディネーター」として、域内の文化交流のためのインフラの創造・運用を積極的に促進することである。たとえば、イスラーム社会、華人社会等を交えたかたちで東アジア全体が参加する「環境・情報・文化サミット」を企画・運営するなどはどうか。

(2) その後、出席議員からつぎのようなコメントが述べられた。

(イ) 「文化の多様性」は東アジアの地域統合における積極的財産であるという指摘は新鮮だが、そのことは東南アジア島嶼部には当てはまるとしても、たとえば巨大な人口を擁し古い文化を持つ中国にも当てはまるだろうか。中国化ではない東アジア地域統合のかたちを展望する上でもこの点は確認されるべきだ。

(ロ) 「近代的家族」は東南アジアや北東アジアの大陸沿岸部では現実に成立しているかもしれないが、内陸部では未だそのような状態にはなく、むしろそちらのほうが大多数を占めるとの指摘もあるが、その点どう考えるか。

(ハ) 東アジアの文化共同体を論じるにあたって避けては通れないのが、儒教・仏教・イスラームといった大宗教の存在だ。これらの大宗教がこの地域の文化的統合を阻むのか否かが確認されるべきではないか。

(ニ) 東アジアにおいては、経済的な実質的統合が進展しており、また政治的統合についての枠組みも成立しつつある、文化的統合は、このような統合過程の結果生じるものであり、わざわざそれ自体をプロパーで論じる必要があるのかと指摘する声もあるが、その点はどう考えるか。

(ホ) 固有性を特徴とする「文化」という概念ではなく、普遍性を示唆する「文明」という概念で東アジアの統合を捉えたほうがいいのではないか。その意味で、我が国のポピュラー・カルチャーは「文明化」していると捉えることができる。

(ヘ) 我が国のポピュラー・カルチャーが東アジアに浸透していることが事実だとしても、その実情は海賊版の普及であるなど、産業的基盤が伴わないケースが多いように思う。そのような実情は放置されるべきではないと考えるが、それでも積極的に評価されるべきと考えるか。

(ト) 「文化」と一言でいっても、マス・メディアを通じて流布されるものとそうでないものとに分かれる。後者が東アジアの地域統合においていかなる役割を果たすのかにも注目すべきではないか。

2. 速記録

(1) 議長挨拶

伊藤憲一 それでは、白石先生がご到着になりましたので、ただいまから第36回政策本会議を開催させていただきます。

本日のこの政策本会議は、「東アジア共同体構想の現状と展望をどう考えるか」という総合テーマのもとで、全11回にわたり開催しているシリーズの第9回目でございます。今回は白石さまや先生を講師にお迎えして、文化交流分野に焦点を当てて、この東アジア共同体構築の現状、課題、背景のようなものを、冒頭小一時間くらいご報告いただいて、その後、皆さんでフリートーキングをしたいと思います。お待ちしております。

白石先生につきましては、お手元にご略歴をお配りしてありますとおり、コーネル大学で文化人類学を専攻されて、アジア研究でPh.Dを取られ、その後、京都文教大学教授などを経て、2002年から東京大学で教授をされておられます。いろいろなご著書や論文がございますが、近年は「グローバル化するポピュラー・カルチャー」という課題にも取り組んでおられます。先生から本日の報告のレジメが皆様のお手元に配られてございますが、「文化とは何か」という定義から始まって、最後に「クラスターを結ぶ『弱い絆の強さ』」というところへ、ご報告の話を進めていただけるようでございます。

私どもこの東アジア共同体というテーマを追っているわけですが、一面において、「それは夢物語であって、実態がない」というようなことを言う論者もたくさんいる中で、当評議会としては、なるべく具体的な事象として、どういっても後戻りのできない統合過程が地域のいろいろな分野で進んでいるということを明らかにしてきたのではないかと、と思っておりますが、そうはいつでも、目に見える、手にとってさわられる形でなかなか把握しがたいのが文化交流分野ではないかと思うので、それだけにきょうの白石先生のご報告には期待している次第です。私は統合というのは最後には、アイデンティティーの面で結晶することができるかどうかということだと思っておりますので、文化交流というのは、非常に重要な分野であると認識しております。それでは、よろしく願いいたします。

(2) 白石さや議員の基調報告

白石さや 今、ご紹介にあずかりました白石です。どうかよろしくお願ひいたします。こういう機会を与えていただきまして、とても光栄だと思っております。私は、東京大学の教育学研究科で教育人類学を教えております。これは、いろいろな文化を超えた教育というものを文化人類学的に見てみようという領域です。

●変化するアジアの家族観

これまで主に東南アジアの子どもたちの生活、学校、近隣社会、国民国家という形で、調査研究をしてまいりました。フィールドワークを核とする文化人類学で子どもの調査研究ということになりますと、小学生、中学生くらいのお子さんがいらっしゃる家庭に、泊まり込んで、家族と一緒に生活をして調査をいたします。子どもたちと一緒に学校へ行って授業を受け、時には学校の先生方を家庭訪問させていただき、放課後は子どもたちと一緒に隣近所で隠れんぼうをして遊んだりしました。隠れんぼうをしますと、隣近所のいろいろな隠れた地形、建物、日常的なコミュニケーションのルートというものが見えてきます。

もちろん主婦の方と仲良くなれないとこうした調査はできません。主婦の方と一緒におしゃべりをしたり、買い物に行ったりします。夕食の後の家族の団らんに入れていただいて、一緒にテレビを見たり、またジャーナリストの方の家庭では、そのころのスハルト政権下で新聞に書けないようなことなどを聞かせていただいたりしました。最初に会ったときに中学生だった人がもう結婚をして、子どもができて、その子どもをオーストラリアに留学させようか、マレーシアに留学させようかという相談にのったりしています。一種の親戚づき合いで、今でも国際電話をかけて、「これ、どういうこと？新聞にはこう書いてあるけれども」と尋ねると何でも答えてくれます。

こうして現地での日常生活そのものを追いかけてきましたので、日本の漫画やアニメやゲームが子どもたちの生活の中に入っていった時期やその経過や実態も、これまでの調査の延長として行ってきました。インドネシアについては、こうした海外からのポピュラーカルチャーが広がる以前の子どもとその家族の生活に関して『Young Heroes』という本をコーネル大学から出版していましたので、いわば「その後の変化」として、1990年ころから子どもたちの生活スタイルが大きく変わってきた様子を追跡しています。この新しい子どもたちのライフスタ

イルは、彼らが若者になり、さらに社会人になっても「卒業」することなく維持されており、したがって、新しい「子ども文化」が、子どもたちの成長とともに「若者文化」になり、今や現世代の「新興都市中間層のライフスタイル」となって、広く家庭生活として定着してきています。

それはどういう変化であるのか。家族史的には「近代的家族の誕生」と規定できるでしょう。つまり、アジア各地においても、従来の伝統的な大家族制に代わって、イギリスやフランスに始まった「近代的家族」が浸透し、核家族として近隣社会から自律し、プライバシーをもつライフスタイルが成立してきました。親戚との行き来が減り、隣近所との交際スタイルも変わってきました。1980年代ころまでは、家の中にいつも親戚や隣近所の人がいて、彼らは勝手口からいつの間にか入ってきていて、おしゃべりしながら、何かつまんで食べている。炊事洗濯といった家事も、家と家の間の空間で近所に人といっしょに行われており、近隣コミュニティの中に家族生活は溶け込む形で存在していました。それが1990年代になると目に見えて変化をし、近所の人にはドアをノックして玄関で挨拶を交わしてから家の中に招き入れられるようになりました。家庭生活のプライバシーというものが認識され尊重されるようになったのです。新しい「近代的家族」の生活の中心にあるのは「近代的子ども」です。家庭のプライバシー空間の核には「愛されて庇護されるべき子ども」がおり、その「子どもの幸福」のために親が努力をする、というライフスタイルが生じてきたのです。伝統的社会では、近隣社会の中で、女性も男性もともに農業や商業や手工業に従事し、その周りで子どもが育っていたのが、今や、近代化とともに、女性が主婦となり、子どもとともに家の中のプライベートな空間で生活するようになりました。そういう社会的文化的変化の中に、漫画やアニメやゲームが入ってきました。

●ポピュラーカルチャーの創造性

ここで「文化」について整理してみましょう。

皆様のお手元に、「文化とは？」というタイトルがあります。1952年にアメリカの文化人類学者のクルックホーンとクローバーという人が文化の定義を150以上リストアップしているように、文化の定義は多様であり、また時代とともに変化をしています。レイモンド・ウィリアムズという人が『キーワード辞典』を記すときに、「文化を定義するのが一番難しい。いろいろな領域の人がこの言葉を使っており、それぞれの人にとってアイデンティティーにかかわ

る大切な概念だからである」と述べています。最近ではグローバル化を論じるうえで、「文化という概念なしでは何も説明できない世の中になってきている」という指摘もあります。

その中で、主要なものを1から7まで並べてみましたが、この7つ全部が今でもそれぞれに使われています。

最初の「a set of standard of perfection」は、むしろ芸術に近い概念です。2番目の「a way of life」(生活のスタイル)は文化人類学者がよく使うもので、この後は文化が複数形で語られるようになり、植民地支配に有利な道具ともなりました。「文化が違うから」それぞれに分割して統治するのは当然であるという政治的役割を果たしてきたわけです。

一転して、ポピュラーカルチャーの研究になると、最初は「文化産業により個性を奪われた大衆をつくり出す」ものと批判され、それが最近になって「政治的な同意と抵抗とが競いあう場であり、政治的、社会的、歴史的現実をつくり出すものである」という見方が提示されてきました。これは「文化とは人々が人生に意味を付与する場」であるという定義の延長上にあるものとして受け入れられるようになりました。さらには、グローバルな時代状況において、もはや「文化というのはブランドであり、マーケットにおいて売買される」という捉え方も始まっています。これはつまり、さまざまな文化ブランドに関するマーケットリサーチをし、魅力的な展示(ないし「発信」)を工夫し、コーディネートして組み合わせ、創造的にプロデュースする、そういう扱いが可能だと考えるようになったということです。

もちろん、こうした21世紀的な文化の捉え方は、20世紀をとおして世界各地で爆発的な発展を遂げてきた近代的学校教育制度およびメディアの存在に負うものです。それに従えば、先に述べたインドネシアにおける近代的家族と近代的子どもの生活スタイルの成立もまた、近代的価値と制度とをもたらした近代的学校教育の定着と、テレビを主とするマスメディアの社会的浸透によって欧米や日本の家庭生活がモデルとして人々の意識に刻印されたことによるものと言えます。すでにメディアによって、世界各地でさまざまな文化がコーディネートされプロデュースされている、ということになります。

●「文化の祭典」による共同体構築

ここで結論を先取りするような形で、「文化の祭典による共同体創造」を提案しておきたいと思います。上述のように、「文化」はコーディネートしプロデュースできるものであり、政治的社会的歴史的現実を創造するものであるならば、それが可能だということになるからです。

例を申しますと、例えば祭典としての「ブルネイ・環境・文化・情報サミット」の企画です。ブルネイはネイチャートレッキングのできる熱帯雨林もあるし、川も海もある、アジアにあるイスラム教の王国としての独自の文化ももっている。何よりも政治的なパワーではありません。そういうところでリゾート・インフラを整備して「環境・文化・情報サミット」を定期的に行う。緊急の課題である環境に関する会議やフォーラムを開催すると同時に、多彩な文化の祭典とし、広くアジア各国のメディアを惹きつけることが必要です。メディアの関心を惹くためには、「環境・情報」というテーマを生かしてシリコンバレーやハリウッドからの人々の参加を促し、環境保護のチャリティーショーやコンサートを開き、NGOが集う場を設定する。アジアにあるイスラムの国ですから、いろいろな文化や宗教に対応できるリゾート開発を行い、多彩な文化のイベントを企画する。常夏で、豊かな自然を抱く土地を、イスラム教徒を含めたアジアの多彩な宗教と文化とに対応する21世紀的リゾート地に育て、シンガポールや上海と組み合わせて観光開発をし、華僑や華人の資金に働きかけ、中近東や南インドの観光客もターゲットにする。

これにはもちろん「開いた東アジア共同体創造」を想定しています。東アジアのお祭り広場として、東アジアの各地からの人々（主要にはメディア）を招くだけでなく、東アジアの外から、中東やカリフォルニアからも多彩な人々が集うメディア空間をデザインするのです。その企画実行において、日本は従来のような「気前の良いスポンサー」の役割はそろそろおりて、新しい役割としての「多彩な文化のコーディネーター」であり、「文化の祭典のプロデューサー」の役割を果たすことを目指すのはいかがでしょう。

●積極的資源としての文化の多様性

この「文化の祭典」においては、アジアの文化の多様性こそが文化的資源であると考えられます。東アジア共同体構想において、「キリスト教という基盤をもつEUと比べて、アジアの文化は多様であり、価値観も宗教も多様であるから、東アジア共同体を構想するのは難しいのではないか」という議論がありますが、EUに追随する必要はないのではないのでしょうか。むしろEUよりももっと未来形のモデルとして「緩やかで多彩な文化共同体」を構想してみるべきだろうと考えます。

この考え方の根拠としては、ヒルドレッド・ギアツというプリンストン大学の教授による論文を挙げたいと思います。彼女はインドネシアの島嶼部を中心にした東南アジア地域の多様な

文化や言語についてのリストをつくったうえで、この多彩な文化を有する地域海域が、ヨーロッパ人が介入してくるもっと前から、中国と、インドと、中近東とを結ぶ海上交通の要衝であっただけでなく、相互間においても緊密な交易ネットワークを構成していたことを指摘しています。

つまりアジアは当時の世界交通の中心であり、東南アジアはその交差点であったこと、その地域にこれだけ多様な文化伝統が育っていたということをどう理解するのか。それは、一般に考えられているような「お互いに孤立していたから、だから文化的に異なっており、多様だ」ということではなく、むしろ「お互いに接触をしネットワークを結びあっていたから、だから多様になった。同時に、多様だったから相互を必要とするネットワークを形成した」という考え方です。例えば、賑やかな商店街というのは、多様な商品を扱う個性的なお店が隣同士に集まることで、初めて多くの人を惹き付ける地域となります。各種のスパイスを生産する島々、お米を生産するジャワ、綿布を産するインド、陶磁器や銅銭その他の豊かな産物を生産供給すると同時に巨大消費地でもあった中国、そういう形でアジア各地は多様に機能役割の分化をし、その結果としてお互いがお互いを必要とするそういう地域的ネットワークが構造化されていたという指摘です。お互いがお互いと異なっていることで、それが経済的文化的な資本となって、お互いがお互いを必要とする、そういう大きな全体というものを構成していたのではないだろうか、と彼女は考えました。

一つの大きな政治体制の中で、あらゆるものが均質化してしまうという一極支配体制ではなしに、多数の多彩なアクターが並存して、それぞれがさまざまな情報に接する中で、あるものはイスラム教を選び、仏教を選び、キリスト教を選ぶというように、主体的にいろいろな文化や宗教や社会体制を選び育んできた。だから相互に接触をしつつ、なおかつ多様である。多様であるから、お互いがお互いを必要として接触をする。そういう海域をここに創っていたのではないかという斬新な仮説です。これは、一定の均質な支配空間を想定する国民国家システム確立以前の東南アジアの状況の説明として納得のいくものであり、今日のグローバル化の時代において、国民国家に加えて多様なアクターによるネットワーク活動が活発化している現在においては、再び有効性をもつようになった理論であると考えられます。

この説を受け入れるならば、東アジアの将来を考えていくときに、東アジアの宗教や文化や政治社会体制、いろいろなものが多様であるということは、必ずしも共同体創出におけるマイナス要因であると決めつける必要はないでしょう。さまざまな文化があるからこそ、それを組み合わせてコーディネートして、新しい形の魅力的な文化の祭典を企画プロデュースすること

ができることとなります。文化が多様であるということは、アジアにとっての貴重な財産と考
えてよいのではないのでしょうか。

東アジア共同体を考えるに当たって、「共同体」の概念自体を変えること、すなわち20世紀
的な国民共同体という宿命的で本質的なものとしてではなく、21世紀的、22世紀的な、「緩
やかで多彩な文化共同体」を目指し、人為的であることを、文化的な多様性をもつことを楽し
むことのできる、そういうビジョンを考えていいのではないのでしょうか。

●「想像の共同体」と東アジア地域統合

ここで、皆様のハンドアウトにある「想像の共同体はいかに創造されたのか？」というところ
のお話をさせていただきたいと思います。

「緩やかで多彩な文化共同体」というとき、その「共同体」を考えるための道筋を考えたい
ということです。ベネディクト・アンダーソンという人が『想像の共同体』という本を書きま
したが、これは国民（ネーション）としての20世紀的の共同体について論じたものです。東ア
ジア共同体を考えるにあたって、ここから何を学ぶことができるのか、何を捨てるべきなのか、
考えてみたいと思います。

ベネディクト・アンダーソンは、第二次大戦後のアメリカの世界戦略の中で、東南アジア研
究のメッカとなったコーネル大学の政治学教授として、世界から集まってきた優秀な学生たち
に、インドネシアという何十、何百という多彩な言語、文化、歴史をもつ地域が、どうして単
一のインドネシアという国民国家として独立したのかということの説明をしなければなりません
でした。どうしてこれだけ文化も言語も違う人たちが、「私たちインドネシア」のために命を
投げ出して戦ったのか。文化が違う、宗教も違う、言語も違う、それでも1つの国民共同体に
なれたのはなぜだろうか。さまざまな理論（共通の敵、教育の過剰等々）を説明しても、学生
たちは納得できないと言いました。アンダーソンは講義ノートを書きかえていくうちに、
とうとうこの『想像の共同体』という世界の国民国家論を書いてしまいました。つまり、文化
も言語も宗教も違う人々がお互いにお互いを「我々として想像してしまった」としか言いよう
がなかったのです。そこで『想像の共同体』というタイトルがついたわけですが、では、どう
してそういうふうに想像してしまったのだろうか。これが、この本の要点です。それは、東ア
ジア共同体を考える上でも参考になるのではないのでしょうか。

アンダーソンによると、近代の国民国家モデルはラテンアメリカで誕生した。まず、(1) 偶

然的に形成された植民地としての領域ができ(2)この領域を政治的経済的に支配するために、交通網が形成され、町が開かれ、港の設備がつくられて、有機的に統合された空間の実態が生じ、(3)そういう実態に、人々が、これは我々の所属する空間であり固有の歴史を持つとして意味を付与した。この3つの過程を経ることで、偶然にできた領域において意味を持つ共同体ができ上がった。この意味の形成において重要な役割を果たしたのが近代的学校教育の旅であり、近代的官僚制における役人の旅であり、新聞に代表される近代的メディアであったとされています。

教育の旅というのは、村の小学校を卒業して、町の中学校に入って、県庁所在地の高等学校に行き、そして首都の、日本の場合でしたら東京の大学に進学する。そういう形で、日本じゅうから、北海道からも九州からも、野心と能力のある若い人たちが、日本という地理空間を体験しながら首都に集まってくる、そういうルートマップを指します。もう一つの官僚の出世の旅も、最初に地方の現場に赴任し、次いで支局に移り、それから中央である東京に戻ってくる。もし途中で足踏みをして、後から来た人に追い抜かれてしまったりすると困る、というルートマップができ上がっています。このルートマップを旅しながら、人々はどこからどこまでが我々の国家領域なのかということを中心で体験するというわけです。

そういう形で見ていきますと、東アジアにおいては、実態的には、経済的な統合がかなり進んでいるように思われます。教育の旅においては、近年、中国からの留学生が一方的に各地に広がりその数が増大していることが少々気になります。官僚の旅は、これは多分、最も保守的な分野であるでしょう。メディアにおいては、これは近年の東アジアにおいては、ポピュラーカルチャーが突出して広がりを見せています。例えば、20年後の国際的な学会では、アジアからの学者は多分『ドラえもん』のテーマソングを歌うことができるだろうと思います。

●ポピュラーカルチャーが育む東アジアの共同体意識

それでは日本のポピュラーカルチャーがどういう形で浸透してきているのか。近年よく取り上げられているのがマンガやアニメですが、その影響を語る前に、基本的な社会的文化的影響について述べさせていただきます。

お手元のプリントの「日本のポピュラーカルチャー」の下の方に「近代的孩子」や「アジア的近代家族」の誕生という項目を記しています。すでに述べましたように、主要にはテレビを通して、社会の基本的なかたちとしての家族像に大きな影響が表れてきています。

私が最初に調査をした60年代、70年代、80年代前半までの家族というのは、インドネシアにおいても、アジアのほかの地域においても、拡大家族であったり、隣近所の人が実質的な家族の役割を果たしていたりしていたのが、90年代以降になると「近代的家族」像が定着してきました。つまり、正式に結婚をしているお父さんとお母さんと、その子どもたちで1つの単位としての家族ができあがる。そして家族にはプライバシーがあつて、隣近所からは自律した時間と空間とをもって生活をする。

その「近代家族」ができるに当たっては「近代的子ども」というものが必要である。「近代的子ども」というのは、社会から隔離されて家庭内で庇護されて育ち、学校に行っているいろいろなことを学んで社会に出ていく準備をする。伝統的社会にみられたように七、八歳から出稼ぎ奉公に行ったりするのは、近代社会においては「児童労働」として禁止される。子どもというものをそういうふうにとらえますと、その子どもを守り、教育していくための家族という機能単位の位置づけが生まれます。その子ども観がどうやってつくられるかというところに、日本のポピュラーカルチャーがかなり関与しているというふうに考えております。ただ、そこでは少し複雑な関与の仕方がみられます。

具体的には、日本のマンガやアニメが海外、特に欧米諸国で受け入れられるときに、最初の障壁となったのが、マンガやアニメのセックスや暴力表現でした。さらには「ガンダム」などはそうすけれども、子どもや若者の主人公が死んでしまう、これがいけない。それは、フランスとイギリスで生まれてアメリカで育ってきた西洋的な「近代的子ども観」からは、子どもに見せてはいけないテーマでした。20世紀のアメリカの児童文学ではまず主人公は死なないことになっていました。西洋で生まれたオリジナルな「近代的子ども観」においては、セックスと暴力と死とは、子どもから隠しておくべきものだったのです。ロボットもそうでした。例えば日本でロボット展をやると、入場者の3分の1は小学生であってもなんら不思議ではない。しかし、同じロボット展をシカゴでやるときには「17歳未満入場お断り」だったりします。欧米のロボット観は日本のそれとは違っており、さらに社会からは隔離されて庇護されて育つ子どもという感覚からは、子どもとロボットとは結びつかない。したがって、日本のマンガやアニメに見られる子どもとロボットとの関係の在り方にはかなり抵抗がありました。日本のマンガやアニメに表現された子ども像は、必ずしも西欧近代の子ども像とは同一ではなかったのです。それが、日本のマンガやアニメが、アメリカやヨーロッパに入っていくときの初期の障害となり、またアジアでも香港やシンガポールのような植民地としての文化伝統を引き継いだ地域におけるマンガやアニメに対する拒絶反応として現れました。

しかし、東アジアにおいては、1980年代になると日本との経済関係の中から新しく新興の都市中間層という人たちが出てきました。彼らは植民地時代からのエリートとは違って、ヨーロッパの近代的な子ども観というものを引き継いでいなかったし、むしろ日本に対して親近感をもつ人々でした。この新興の中間層にとっては、「近代的家族」像や「近代的子ども」像は、ヨーロッパからではなく日本のポピュラーカルチャーを経由して入ってくるようになります。日本との関係の中で余裕のある生活ができるようになり、子どもを学校に行かせることができるようになり、家庭にテレビを置くことができるようになった人々であるからです。インドネシアやシンガポールや香港で、日本のマンガやアニメに関する論争が起こるときには、植民地時代からエリートであった人たちと、日本との関係の中で登場してきた新興中間層との間の文化的な覇権をめぐる論争の様相を呈します。流れとしては新興都市中間層に有利な展開であるようです。

そういう形で、必ずしも西洋的な意味での「近代的子ども観」とは少々違う、日本経由の、いわば「アジア的近代的子ども観」というものが広がっているようです。そしてそれは高度に消費主体としての子ども像であり家族像となっています。具体的には、テレビ・アニメにはスポンサーの広告が付きませんが、粉ミルクや、石けんや、コカ・コーラや、マクドナルドに囲まれた家族生活であり、子どものための消費をすることが家族の目的であるかのようです。消費スタイルによって、子どもの生活を創り上げる、すなわち、ショッピングモールで子どもにキャラクターグッズを買うことが家族の幸せだという形での子ども観と家族観が生まれてきています。

かつては東南アジアというのはナショナリズムを代表する地域でしたが、近年は、どうもナショナリズム以上に、まず自分の子どもと家族とを考える。そういう時代になってきているように思います。

そういうふうに、家族を第一に考える。アイデンティティーとしてはもちろんインドネシア人なんだけれども、それ以上に、第一には自分は父親である、家族を中心に、家族の幸せを中心に考える、という方向が生れてきているように感じます。

この生活感覚からは、「東アジア共同体」という名前は、彼らに警戒心を起こさせてしまう。戦前の大東亜共栄圏の連想もあるわけですが、大切な家族の幸せを脅かすのではないだろうか、という警戒心です。この警戒心を含めて、東アジアにはポピュラーカルチャーを通してかなり共通する生活感覚が共有されるようになってきていると思われる。

「想像の共同体」としての国民共同体が、教育とメディアによってでき上がってきたという

ことを考えますと、上述のようにメディア、特に映像メディアによるポピュラーカルチャーの影響によって、アジアに広がる共同体意識は徐々にできあがってくるだろうと思っています。生活感覚の共有はすでに進行しているからです。これからさらに東アジアの各地において、家族のリビングルームのテレビに、日常的に東アジア各地のニュースや人気スターが映し出される状況が増えることも東アジア共同体意識の醸成には有効なことであろうと考えます。韓国のテレビ・ドラマの俳優であったり、台湾や中国の映画スターや映画監督であったり、日本のストリートファッションであったり、そういうアジアの映像が日常的に消費される中で、東アジアの一体感というものが形成されていくのだと考えます。

そして国家ができることの一つには、こうした東アジア規模でのメディア創造に携わることのできる文化プロデューサー、文化コーディネーターになれる、そういう人材を養成していくことにあるのではないかと考えております。

すみません、急いで。これで、大体の時間で終わらせていただきました。ありがとうございました。

CC-J-III-0031



東アジア共同体評議会

〒107-0052 東京都港区赤坂 2-17-12-1301

[Tel] 03-3584-2193 [Fax] 03-3505-4406

[URL] <http://www.ceac.jp> [Email] ceac@ceac.jp